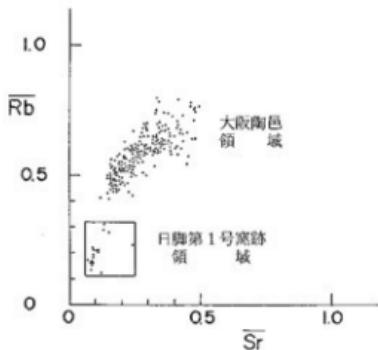


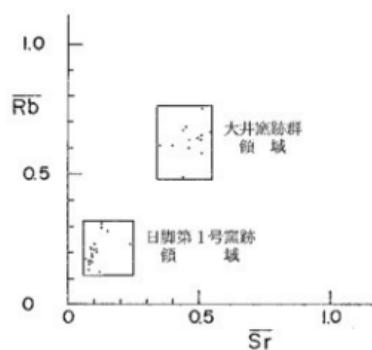
### 3. 分析結果

まず、はじめに日脚1号窯の(1)窯体内、(2)灰原、および、(3)少し離れた場所に2次堆積していた須恵器片のK、Ca、Fe因子を133図に比較してある。三者の違いは本質的ではなく、同質の須恵器、つまり、日脚1号窯産須恵器と考えられる。

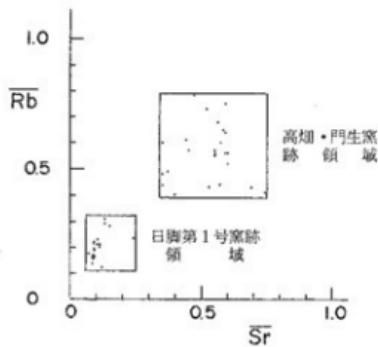
134図には、各地の窯跡出土須恵器の地域差をもっともよく表示するRb-Sr分布図を示す。比較のために大阪陶邑産須恵器もプロットしてある。そうすると、日脚1号窯跡出土須恵器もよくまと



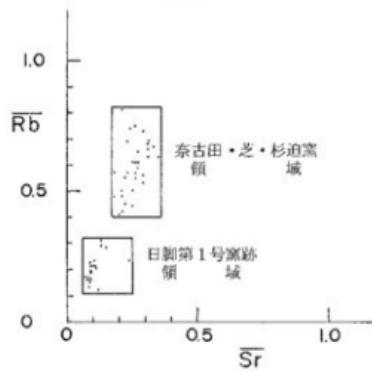
第134図 日脚1号窯出土須恵器のRb-Sr分布図



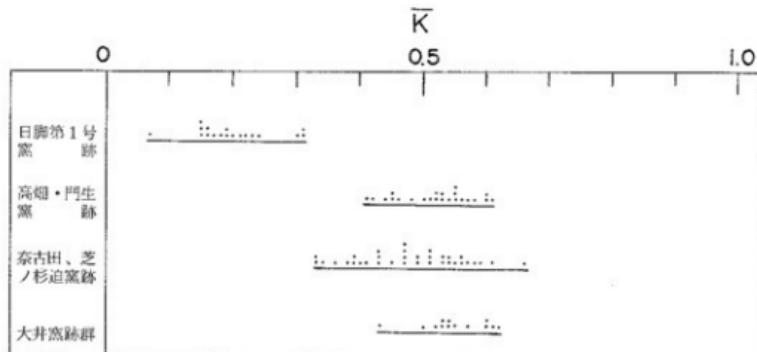
第135図 日脚1号窯と大井窯跡群出土須恵器のRb-Sr分布図



第136図 日脚1号窯と高畑、門生窯跡出土須恵器のRb-Sr分布図



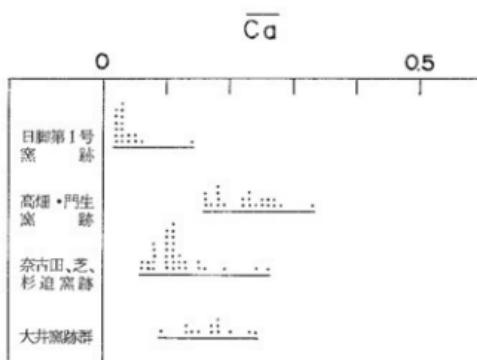
第137図 日脚1号窯と奈古田、芝、杉迫窯跡出土須恵器のRb-Sr分布図



第138図 島根県内の窯跡出土須恵器のK量の比較

まって分布することが分かる。そして、大阪陶邑産須恵器に比べてRb量が少なく、Sr量もやや少ないという特徴をもち、両者の相互識別は完全に可能であることが分かった。この結果は、今後島根県内の5～6世紀代の古墳・遺跡に大阪陶邑産須恵器がどのように分布するかを研究することができるることを意味する。

次に、日脚1号窯の須恵器を島根県内の他の窯跡出土須恵器の化学特性と比較してみよう。まず、Rb-Sr分布図からみてみよう。135図には、松江市大井窯跡群の須恵器と比較してある。日脚1号窯の須恵器は大井窯跡群のものに比べて、Rb量もSr量も少なく、完全に相互識別できることが分かった。また、B6図には高畠、門生窯の須恵器との比較を示してある。高畠、門生窯跡の須恵器は大井窯跡群の須恵器と同じRb、Sr特性をもっており、したがって、日脚1号窯のものとは完全に相互識別ができる。137図には、浜田市の奈古田窯跡、益田市の芝、杉追窯跡の須恵器との比較を示してある。ここで、Rb量は明確な違いが認められ、相互識別は完全にできる。さらに、他の因子についても調べてみた。138図には、K因子を比



第139図 島根県内の窯跡出土須恵器のCa量の比較

較してある。日脚1号窯のものは他の窯跡の須恵器に比べてK量も少なく、完全に識別されることが分かった。139図には、Ca因子を比較してある。Ca量も日脚1号窯の須恵器には少なく、他の窯跡のものから識別される。140図には、Fe量を比較してある。Fe因子でも日脚1号窯の須恵器は他の窯跡のものから識別されることが分かった。

以上の結果、日脚1号窯の須恵器はいろいろの因子で島根県

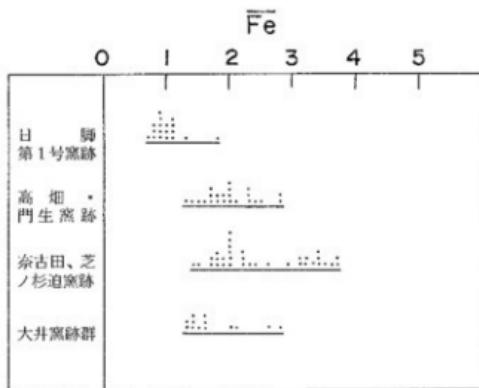
内の他の窯跡の須恵器からも識別できることが分かった。このことは今後、これらの窯跡で作られた須恵器が島根県内のどの古墳、遺跡へ供給されていたかを研究する道が開かれたことを示す。

このようにして、胎土分析は島根県内でも須恵器、埴輪、瓦などの移動を通して古代史を展開する上に大いに役立つことになろう。

#### 参考文献

- 1) 三辻利一 「古代土器の産地推定法」

考古学ライブラリー 14 ニューサイエンス社 (1983)



第140図 島根県内の窯跡出土須恵器のFe量の比較

## VI 日脚遺跡須恵器窯の考古地磁気年代

島根大学理学部 時 枝 克 安  
伊 藤 晴 明

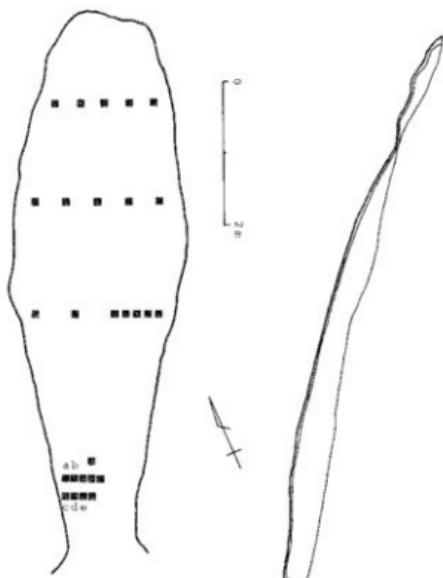
地磁気の方向は、10年程度の時間が経過すると目立って変化する。このようなゆっくりした変化は地磁気永年変化と名付けられている。一方、古窯跡等の焼土が帶びている熱残留磁気の方向は、焼成時の地磁気の方向と正確に同じである。これら二つの事実が、考古地磁気法による年代推定の根拠となっている。つまり、ある地域において、地磁気永年変化の様子が明らかにされ、地磁気の方向と年代との関係が分かっていれば、年代未知の焼上遺跡の熱残留磁気の方向を、地磁気永年変化曲線と比較して、焼土の最終焼成年代を推定できる。西南日本では、過去2000年間の地磁気永年変化が、数多くの測定に基いて明らかにされているので、日脚遺跡須恵器窯について、信頼度の高い考古地磁気年代を推定できる。

窯 日脚遺跡須恵器窯は全長約7m、最大幅約2mの細長い登り窯である。

窯体は長軸をN30°Eの方向に沿い、南に傾斜して作られている。窯底は、窯の中央より上部で約20度の勾配をもつが、下部ではほぼ平坦である。この窯の考古学的推定年代は、出土した須恵器の形態から、5世紀末から6世紀前半と推定されている。

試料 第141図に示されているように、窯底のほぼ全面から均等に27個の定位試料を採取した。方位の測定はクリノコンパスを用いている。試料採取場所偏在しないようにすることによって、局部的搅乱による影響を排除できるようとした。

測定結果 試料は一辺3cmの立方体に整形した後、無定位磁力計を用いて熱残留磁気の方向を測定した。試料はいずれも強い熱残留磁気を帶びており、



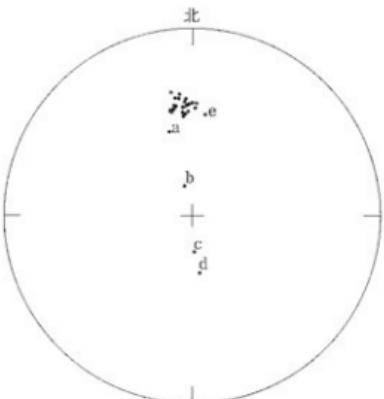
第141図 窯体および試料位置

磁気方向を正確に測定できた。測定された磁気方向は142図のシュミットステレオ投影図に示されている。測定点は5つの試料(a～e)を除くと、非常に良くまとまっている。これら5つの試料は、141図からわかるように、焚口に近い同じ場所から採取されている。したがって、これらの試料の磁化方向が他からずれているのは、局部的な擾乱を受けて試料が動かされたためと結論できる。磁化方向が他からそれる5つの試料を除いた残りについて、平均方向及び信頼性のめやすとなる定数を計算すると次のようになる。

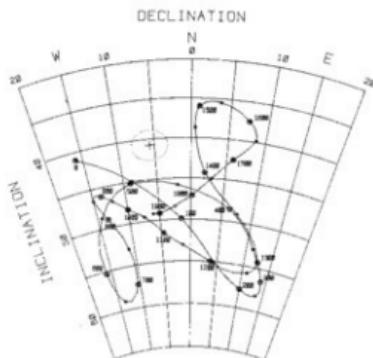
平均伏角( $I_n$ )	41.36°
平均偏角( $D_n$ )	6.00°W
Fisherの信頼度係数( $K$ )	225
95%誤差角( $\theta_{95}$ )	1.98°
採用した試料の数( $N$ )	22

考古地磁気年代 143図の地磁気永年変化  
 (1) 図上に、この窯の熱残留磁気の平均方向を+印で、誤差の範囲を点線の楕円で示す。平均方向に近い点を、地磁気永年変化曲線上に求めるとき、この窯の最終焼成年代として、50±20、480±20、1440±50 A.D. の三つの時期が可能となるが、この窯は須恵器窯であるので、最適年代として、480±20 A.D.を選ぶのが妥当である。平均方向が地磁気永年変化曲線からずれているのが気になるが、永年変化曲線は、それ自身も誤差をもっており、実際は「線」ではなく、誤差に対応した幅をもつ「帯」であることを考慮すれば納得できる。このようにして得られた 480±20 A.D. という考古地磁気年代は、5世紀末から6世紀前半という考古学的推定年代とよく整合している。

注 1) 広岡公夫(1977)第4紀研究15、  
 200～203



第142図 热残留磁気の方向



第143図 西南日本における過去2000年間の地磁気永年変化と日脚1号窯の熱残留磁気の方向

## VII 浜田市日脚遺跡におけるアイラおよびアカホヤ火山灰の産状と遺跡の年代について

島根大学教育学部 三浦 清  
林 正久

### 1. まえがき

浜田市周布川河口部右岸地帯に広がる標高100~200mの定高性の山地、いわゆる都野津面の山麓に位置する丘陵地帯に遺跡があり、織維土器群ならびに押型文土器群の出土層は標高ほぼ20~40mである。

日脚におけるこれらの出土層とアイラ A T 火山灰およびアカホヤ Ah 火山灰の関係が明らかになつたので報告する。

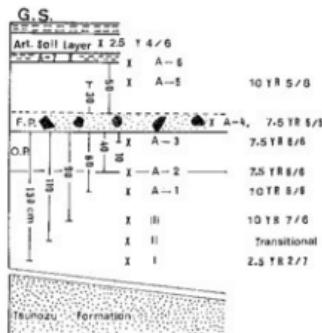
火山灰の同定にはエネルギー分散型X線マイクロアナライザーが用いられ、その火山ガラスの化学的特性によって決定された。

### 2. 試料採取地の土壤断面

採取地の基盤岩は新第三系の安山岩、石英安山岩からなり、その上を不整合に都野津層がおおっている。

採取地の断面図を第144図に示す。この図に示すように、地表は再堆積した火山灰層によっておおわれ、その中から遺物が出土する。

地表面は畑として利用され腐植まじりの土となっているが、その下部にはシルトまじりのやや粗い砂層が分布する。この粗い砂層は畑にする為の人为的な盛土層である。その下位にはA-7で示される厚さ10cmの腐植土層がある。これと織維土器群出土層(F.P.層)との間に厚さ50cmの10 YR 5/8の色調を小す砂まじり粘土層がはさまれる。試料A-6はA-7で示される腐植土層の直下で、またA-5は腐植土層下20cmで採取したものである。この下には織維土器群出土層(F.P.)があり、縞が点在する。この延長上にはこの層準に黒曜石などの石片もあり、縞の起源は人為的で



第144図 日脚遺跡土壤断面と試料採取地点

(F.P 織維土器群出土層  
O.P 押型文土器群出土層)

ある可能性が強い。礫の埋める基質の部分の試料がA-4である。この繊維土器群出土層の直下Kの厚さ40cmの押型文土器群出土層がある。A-3はこの層準の中で繊維土器群出土層直下10cmの位置から、またA-2は40cmの位置から採取したものである。A-1はこの押型文土器群出土層の下位層準の試料でA-2の下20cmで採取した。試料一Ⅲから下位はやや色調が変化し、試料一Iは灰褐色、試料IIは2.5 YR 2/7の基地に10 YR 7/6が斑紋状に分布し、2.5 YR 2/7から上に向って次第に10 YR 7/6になろうとする変移的な色調をもっている。肉眼的にⅢからIまでは都野津層の粘土層と誤認されやすいが、特に試料一Iでは著量の火山ガラスが含まれることによって簡単に区別される。

以上の土壤断面の試料一Iから試料A-6までどの層準にも火山ガラスが含有され、土壤層が火山灰をいろいろな割合で混入した二次的堆積物であることを示す。特に、この位置が火山灰層に対する基準のくぼみであったことからも、周辺からより侵食による流入堆積しやすい場所であったと考えられる。

第145図は純度の高いアイラ火山灰AT（仁多郡三成町三沢産）のX線回折図と本産地の土壤のそれとを比較したもので、まさにそれが純度の高い一次堆積物ではなく、二次的堆積物であることを裏づけるに十分な資料である。

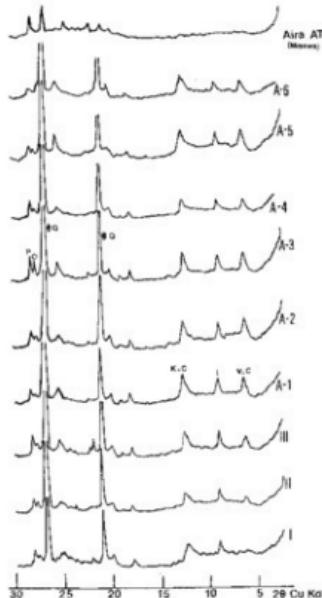
### 3. 火山灰の火山ガラスの化学的特性とその対比

三浦・林（1985）は山陰およびその周辺の火山灰のうち、アイラ火山灰(AT)とアカホヤ火山灰(Ah)の火山ガラスについて研究し、両者がそれぞれ山陰地方の他の火山灰と異なる化学的特性を持っていることを見出した。この結果を第146-A図、146-B図および第147-A図、147-B図に示す。

この結果は上述の理由から確実に対比に使用することが出来、日脚遺跡の火山灰に含まれる火山ガラスの対比にもこの結果を利用した。

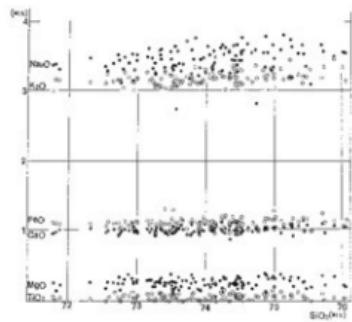
### 4. 日脚遺跡の土壤断面にみる火山ガラスの化学的特性と対比

分析試料は第148図から第152図に示すII、A-1、A-3、A-4、A-5の5資料で、分析

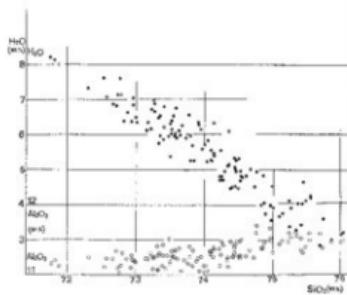


第145図 日脚遺跡土壤断面図試料のX線回折図

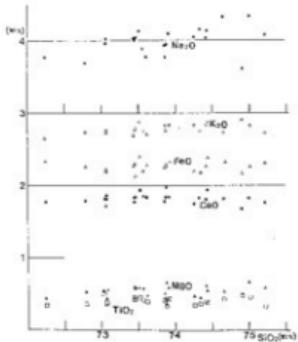
(P:斜長石 O:正長石 Q:石英 K:カオリナイト  
C:緑泥石 I:イライト V:バーンミキュライト  
アイラ火山ATは仁多郡三沢産の純度の高い堆積物である。)



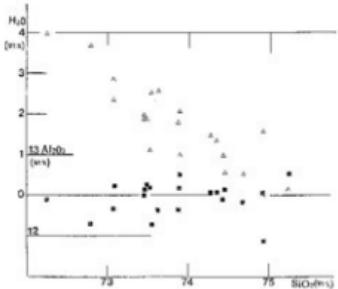
第146-A図 アイラ火山灰(A.T.)の化学成分  
(TiO<sub>2</sub>, MgO, CaO, FeO, Na<sub>2</sub>O)



第146-B図 アイラ火山灰の化学成分  
(Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>, H<sub>2</sub>O)



第147-A図 アカホヤ火山灰(Ah)の化学成分  
(TiO<sub>2</sub>, MgO, CaO, FeO, K<sub>2</sub>O, Na<sub>2</sub>O)

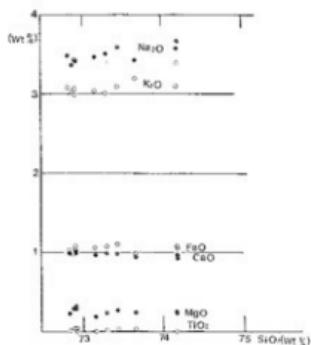


第147-B図 アカホヤ火山灰の化学成分  
(Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>, H<sub>2</sub>O)

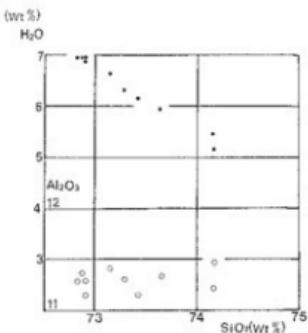
項目は第146図と同様 TiO<sub>2</sub>, MgO, CaO, FeO, K<sub>2</sub>O, Na<sub>2</sub>O, Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>, H<sub>2</sub>O および SiO<sub>2</sub>である。ただし図示していないが同時に P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>, MnO, Cl についても測定すみである。FeO については Fe<sup>++</sup> もすべて Fe<sup>+++</sup> として FeO に算入した。

これらの化学特性は明らかに I, A-1, A-3においては完全に第146図のアイラ火山灰A.T.と一致し、A-4とA-5についてはアイラ火山灰A.T.とアカホヤ火山灰Ahが混合していることがわかる。

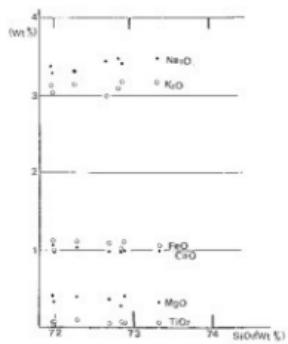
試料IとA-1は完全に押型文土器群出土層の下位層準に相当し、A-3は押型文土器群出土層に相当する。また、試料A-4は繊維土器群出土層に相当し、A-3の押型文土器群をおおっている。試料A-5は第152図に示すように、さらにA-4の繊維土器群出土層をおおっている。



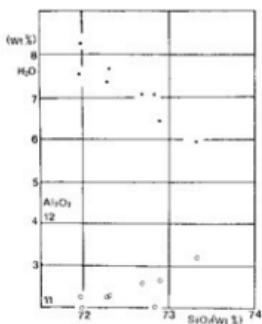
第148-A図 試料Iの化学成分変化図  
(TiO<sub>2</sub>, MgO, CaO, FeO<sub>3</sub>, K<sub>2</sub>O, Na<sub>2</sub>O)



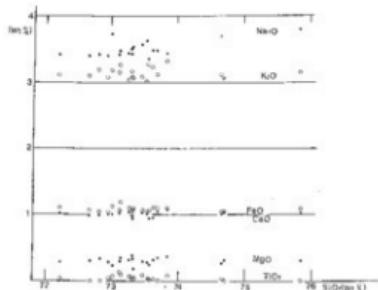
第148-B図 試料Iの化学成分変化図  
(Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>, H<sub>2</sub>O)



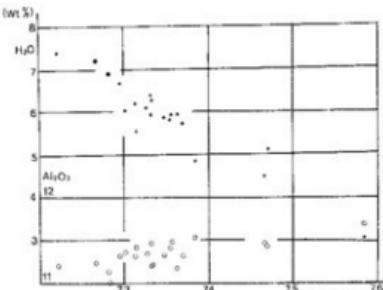
第149-A図 試料A-1の化学成分変化図  
(TiO<sub>2</sub>, MgO, CaO, FeO, K<sub>2</sub>O, Na<sub>2</sub>O)



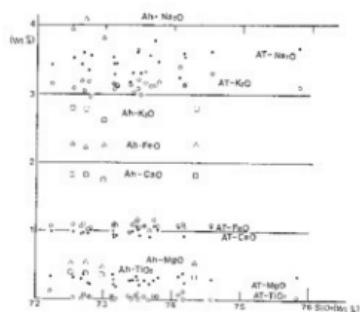
第149-B図 試料A-1の化学成分変化図  
(Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>, H<sub>2</sub>O)



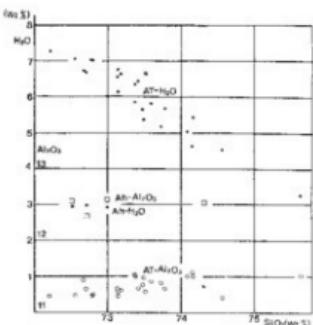
第150-A図 試料A-3の化学成分変化図  
(TiO<sub>2</sub>, MgO, CaO, FeO, K<sub>2</sub>O, Na<sub>2</sub>O)



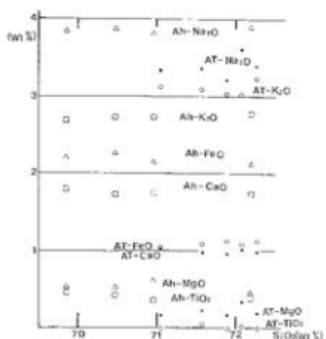
第150-B図 試料A-3の化学成分変化図  
(Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>, H<sub>2</sub>O)



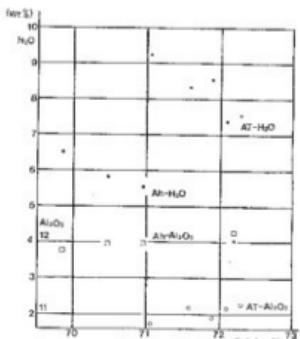
第151-A図 試料A-4の化学成分変化図  
( $TiO_2$ ,  $MgO$ ,  $CaO$ ,  $FeO$ ,  $K_2O$ ,  $Na_2O$ )  
AT: アイラ Ah: アカホヤ



第151-B図 試料A-4の化学成分変化図  
( $Al_2O_3$ ,  $H_2O$ )  
AT: アイラ Ah: アカホヤ



第152-A図 試料A-5の化学成分変化図  
( $TiO_2$ ,  $MgO$ ,  $CaO$ ,  $FeO$ ,  $K_2O$ ,  $Na_2O$ )  
AT: アイラ Ah: アカホヤ



第152-B図 試料A-5の化学成分変化図  
( $Al_2O_3$ ,  $H_2O$ )  
AT: アイラ Ah: アカホヤ

## 5. 火山灰の降下時代からみた日脚遺跡の年代について

アイラ火山灰(AT)については町田ら(1976)により2.1~2.2万年前のアイラカルデラの大噴火によってもたらされたものとされ、アカホヤ火山灰(Ah)は同じく町田ら(1978)によって6,000~6,500年前に鬼界カルデラから噴出されたものとされた。

このような時代的背景からすると押型文土器群出土層は2.1~2.2万年よりも新しく、かつ、6,000~6,500よりも古いくことになる。

一方、織維土器群出土層はアカホヤ火山灰出現層のうちの最下位の層準と一致しているところから、ほぼアカホヤ火山灰降下時代の遺跡とみることが出来よう。

## 6. む す び

遺跡の出土層がアイラ火山灰(AT)、アカホヤ火山灰(Ah)の火山ガラスを含有するところから、火山ガラスのエネルギー分散型X線マイクロアナライザーによる化学分析を通じて正確に火山灰の産状と同定を行い、それによって遺跡の時代の範囲を考察した。

## 文 献

- 三浦 清・林 正久(1985)：山陰ならびにその周辺地域に見られるアイラ火山灰(Ah)およびアカホヤ火山灰(Ah)の火山ガラスの化学的特性、山陰地域研究(自然環境)第1号  
71-80、(鳥根大学)

## VII まとめ

### 1. 縄文時代早期の遺構と遺物について

#### 集石炉

縄文時代早期の集石遺構が検出されたのは県内初であるが、全国的にみると当該時期には一般的にみうけられる遺構である。その機能については、全ての集石遺構が同一機能であったとは考えられず、その状態により灰跡や集石墓などの機能が考えられている。本遺跡検出の集石遺構は、石が火を受けて赤変していたことから、集石炉と考えるのが妥当であろう。

一方、これらの集石炉の使用法については、民族誌からの類推により、地炉として蒸し焼きや石焼料理を行うアースオーブン (earth oven) や、容器に焼石を投入して湯を沸かし、煮炊きを行うストーンボイリング (stone boiling) などが一般に考えられている。本遺跡集石炉は、石が面をそろえて並べられていることからストーンボイリング (stone boiling) とは考えられない。しかし皿状土壇を伴わないため、焼石を土壇内に充填し、その上を葉などでおおって蒸焼をする、一般的なアースオーブン (earth oven) とも考えにくいといえる。想像が許されるならば、比較的大形のやや扁平な石を用い、上面をそろえるように配石していることから、おそらく焼石を並べて、その上で食物を焼くような使用法がとられたものと考えることもできよう。

#### 遺物出土状況について

A地区において、縄文時代早期末の土器、石器が集中して出土し、その出土の粗密の状況から、3棟の住居跡が存在した可能性を指摘した。その形態、規模は全く不明だが、あえて推定するならば径4m前後の円形に近い形の住居2棟、径2.5m前後の小形の住居1棟が想定できる。縄文時代早期の住居跡は県内には例がなく、広く西日本にまで発見例を求めて極めて少数で比較が難しいが、<sup>(1)</sup>広島県松ヶ岡遺跡、奈良県大川遺跡、鹿児島県加栗山遺跡<sup>(2)</sup>に類例が求められる。<sup>(3)</sup>松ヶ岡遺跡では、長径2.75mの楕円形住居跡が、大川遺跡では、押型文土器に伴って径3.8mと、径3mの2棟の円形住居跡が検出されている。一方加栗山遺跡では、隅丸方形を呈す住居跡が16棟検出され、平面規模は7.6m×1.9mのものから5.1m×2.8mのものまである。これらの例はいずれも離れた地域で、また時期的にも本遺跡例より若干さか上がるものなので、直接比較することは危険ではあるが、ともに本遺跡と近い規模で、これらの遺物のまとまりが住居跡を反映していることを否定するものではないといえよう。

さて、これらの遺物のまとまり（I～III群）のうち、I群とII、III群では土器、石器の組み合せが異っていた。詳しくは後述するが、このことからそれぞれの群によって時期差がある可能性も考えられる。すると、これらが单一時期に形成されたものではないことになる。一方A地区より約40m

北西のB地区においても、ほぼ同時期の遺構・遺物が検出されており、その東西に広がるなだらかな尾根上も後世の擾乱を受けて検出できなかったものの、当該期の遺構が存在していたことは想像に難くない。おそらく、縄文時代早期後葉において、若干の時期幅をもって日脚の丘陵上に集落が存在していたと考えられよう。

#### 縄文土器

A地区、B地区より、およそ縄文時代早期後葉の土器が出土した。これらの土器は厚さが7mm～12mmと分厚で多くは少量ながら繊維を含む。文様は、内外面、あるいは外面に太く粗い縄文を施すものがあり（第37図1～11、第84図）、口縁端には刺みや、縄文原体を押圧したものがある。これらの一群をI類と呼ぶ一方、外面もしくは片面に条痕のみを施す一群（第37図12～20）があり、その中には数段にわたり波状に刺突を行ったもの（20）もある。この一群をII類と呼ぶ。底部は平底である。

これらの土器の類例を求めるに、県内では籠川郡大社町菱根遺跡、松江市タテチョウ遺跡、西川津遺跡の出土土器などをあげることができる。菱根遺跡出土土器は、報告によると厚さ6～13mmで8mm前後のものが大部分を占め、胎土には少量の繊維を含む。文様は内外面縄文のものが最も多く、外面のみ縄文および内外面条痕のものが若干含まれる。中でも注目されるのは、報告において「異縄文」として別に一括された類である。燃りがゆるいためか縄文の各節が粗くすき間が大きいもので、日脚I類と極めてよく似ている。特に全て内面には条痕調整がみられる点は、日脚B地区出土土器（第84図）と共に通している。タテチョウ遺跡からは、内外面条痕を施した類、口縁端に凸帯<sup>(5)</sup>を貼り付けてその上に刺突や刺み目を施す類の二類を中心に出土しており、いずれも7～13mmと分厚で繊維を含む。前者は日脚II類がほぼ対応し、後者はA地区出土第38図22と類似している。西川津遺跡においてもタテチョウ遺跡と相似した土器が出土している。

さて、これらの土器の編年的位置については、まずB地区での層位的事実より、押型文土器より新しい時期のものであることは明らかになった。より細かい位置付けを行うには、広島県帝釈峠遺跡群での層位的事実が参考になるであろう。<sup>(6)</sup> 帝釈寄倉岩陰遺跡では10、11層より、器壁が厚く胎土に繊維を含む土器群が出土し、その上層から羽島下層式土器群が出土している。この関係は馬渡、観音堂、豊松堂面、戸宇牛川などの各遺跡でも同様で、これらの「繊維土器群」が押型文土器群と羽島下層土器群の間に埋める時期のものであることが明らかになっている。さらに、寄倉10、11層、豊松堂面9、10層、戸宇牛川5、6層のあり方などから、河瀬正利氏は「繊維土器群」を3群に分け、その編年を行っている。<sup>(7)</sup> すなわち第1群が器壁がやや薄く、胎土に少量の繊維を含み条痕地に縄文のめぐらされるもの、第2群は、器壁が10mm前後と厚く繊維も多量に含み、内外面とも条痕調整が著しく、縄文、刺突文、竹旨状の沈線文を施すもの、第3群は器壁が10mm前後と厚く繊維を多量に含み、条痕調整のみられないもの、とし第3群→第1群という変遷を提示された。

山陰地方においては、まだ当該期の様相は明確でなく、帝釈峠においてのあり方をそのままあて

はめるのは危険ではあるが、日脚遺跡出土の土器群をこれらと比較すると、その特徴からやや器壁は厚いものの、およそ第1群に対応するものと考えられ、「織維土器群」のなかでも新しい時期に位置づけられよう。

ところで、A地区においては、遺物が3群に分かれて出土し、その遺物群により遺物の型式の組み合せに若干差異があることは前に述べた。すなわち、I類土器が多く出土する群ではA類石縫（鍬形縫）が高い割合で伴い、II類土器が多く出土する群ではA類石縫の占める割合が小さくなっている、A類石縫（鍬形縫）がより古い様相を示すとすると、I類がII類に先行する可能性があることを指摘した。このI類、II類の先後関係について、個々の土器をとりあげて再検討してみたい。まずII類土器では、条痕地に数段にわたって波状に刺突を行った土器（第38図20）が注目される。また21も、条痕はみられないものの同様の文様構成をもち、22は口縁端に隆帯を設け、隆帯上とその下に刺突を行う。これらの刺突文を施す土器の系統を考えるうえで、県内では近年発掘調査によ<sup>(8)</sup>って出土した西川津遺跡海崎地区出土の土器群が参考になると考えられる。西川津遺跡海崎地区では、条痕調整地で口縁端に隆帯を設け、隆帯上及びその下方に刺突や押し引き文を施す土器がまとまって出土しており、日脚II類の一部と文様構成が類似している。西川津遺跡海崎地区出土の土器群が、羽島下層I式と併行もしくは若干さか上る時期と考えられ、鳥取県米子市目久美遺跡、陰田遺跡においても羽島下層I式より若干さかのぼる可能性のある同様の土器群が出土している。日脚II類は西川津遺跡土器群より器壁が厚く、これらよりやや古くなると考えられることから、日脚II類は、羽島下層I式併行もしくはそれより若干さかのぼる土器の直前、すなわち、「織維土器群」では最も新しい時期と考えられ、逆にいえば、羽島下層I式で隆盛する刺突文、押引文の系譜が日脚II類にまでさかのぼる可能性も考えられる。一方、日脚I類については、その系譜をたどるのは困難であるが、B地区出土土器の一部に、表面に強いナデを施して凹線状にしたもの（第84図9）や、A地区でI類とともに出土した非常に分厚の平底の底部（第38図24）などは、滋賀県石山貝塚で出土している茅山式系<sup>(9)</sup>の土器に類似したものがある。河瀬正利氏は、帝釈城出土土器の特徴から茅山式を織維土器II群にはほぼ併行させている。すると、日脚I類は若干古い様相を残していると考えることもできる。

河瀬編年	日脚遺跡	県内他遺跡
押形文 II	B地区11層	九郎原 I 横道
押形文 III		菅沢
織維 III群		
織維 II群		
織維 I群	I類	菱根
	II類	タテチョウ
羽島下層 土器群		西川津 海崎

第153図 日脚遺跡出土土器編年関係図

以上のことまとめると第153図のようになる。日脚I類、II類土器は、「織維土器群」のなかで新しい段階のもので、その中でもI類→II類という前後関係が考えられ、II類はほぼ羽島下層I式併行、あるいはそれに若干先行する土器群直前に位置づけられよう。

#### 石 器

本遺跡において縄文早期の土器とともに出土した石器は、狩猟具としての石鏃、尖頭器、加工用の道具としてのスクレイバー、二次加工剥片、楔形石器など、食物加工用と考えられる磨石類、伐採掘削用と考えられる石斧類、漁撈用の石錘であり、ほぼ縄文時代に一般的な石器の組み合わせといってよいであろう。しかし、その比率をみると、石器の占める割合がA地区では60%、B地区では45%で、その割合は非常に高いといえよう。

石鏃についてみてみると、A地区、B地区ともに、A類（鍛形鏃）が全体の過半を占めていることが明らかになったが、A地区においては、遺物群ごとに石鏃の型式組成が異なり、それが時期差を反映している可能性を指摘できた。すなわち、日脚I類土器が多く出土する群（I群）にはA類（鍛形鏃）が高い比率で伴う。一方、日脚II類土器が多く出土する群（II、III群）では、A類の比率が低くなり、B類が数多く伴っており、縄文時代早期後葉、「織維土器群」の最も新しい段階で石鏃型式の組み合わせが変化する可能性が考えられた。こうした石鏃型式の変遷を周辺の遺跡に求めると、帝釈馬渡遺跡では、第3層下層より、粒子の細かい押型文（黄鳥式）土器に伴って鍛形鏃が多く出土し、第3層上層からは、やや粒子が大形の押型文土器に伴って擦りの浅い、鍛形鏃のやや退化した型の右鏃が多く出土している。この馬渡遺跡のあり方からみると、鍛形鏃の減少する時期が押型文土器の新しい時期となり、日脚遺跡のあり方と異なっている。これが地域差として捉えられるのか、あるいは「織維土器群」の時期に亘り鍛形鏃が増加するのかは不明といわざるをえず、今後、周辺地域での調査例の増加を期待したい。

石鏃以外の剥片石器は、定形的なものではなく、いずれも不定形剥片を素材に、簡単な加工を施したものである。これは次に述べる、剥片剝離技術とも関係していると考えられる。剥片剝離手法は打点を移動しながら、石核の縁辺より剥片を剥ぐ手法と、打面を転移しながら、剥片を取っていく手法の大きく2つに分けられるが、いずれも規則的な技法によるものではなく、目的剥片の大小により、石核の使い分けが行われていた程度と考えられる。こうした状況は、付近の那賀郡金城町岩塚II遺跡（縄文時代前期が中心）でも同様で、縄文時代では一般的なあり方と考えられよう。

- 注(1) 広島県教育委員会、広島県埋蔵文化財調査センター『松ヶ浦遺跡群発掘調査報告』1981  
(2) 奈良県教育委員会「大川遺跡第三次発掘調査概報」「奈良県遺跡調査概報・1980年度」1981  
(3) 鹿児島県教育委員会「加栗山遺跡」「鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書」(3) 1981  
(4) 酒井仲男・石部正志「鳥根県篆葉遺跡発掘調査報告」「同志社大学人文科学研究紀要」II 1952  
(5) 鳥根県教育委員会『タテチヨウ遺跡発掘調査報告書』(1) 1979 (6) 松崎秀和『帝釈城』1969  
(7) 河瀬正利「中国山地帝釈城跡における縄文早期文化の二・三の問題」『考古論集』1977  
(8) 鳥根県教育委員会が調査を行った。 (9) 平安学園考古クラブ編『石山貝塚』1956

## 2. 発掘調査された古墳について

今回の調査で 6 基の古墳を検出したが、それらはいずれも墳丘のほとんどが破壊され、わずかに石室の根石が残っている程度のものであった。しかしながら石見地方において、これだけまとまつた後期古墳の調査例がないため、今回の調査は当地方の後期古墳を考えるうえに重要な手掛りを与えるものとなった。そこで、日脚遺跡の古墳の性格を考える前に、石見地方の後期古墳について概要を述べることにする。

### 1) 石見地方における後期古墳について

当地方は、島根県の内方にあたり、山口県および広島県に接した地域で、広島県に源を発し日本海に流れを注ぐ全長 200 km の江川をはじめ比較的大きな河川が存在しているが、平野は海岸部に小規模な沖積地が点在する程度である。このような地理的条件のためか出雲部と比べ大形の古墳は少なく、海岸部及び江川流域に小規模な後期古墳が集中して存在する。

石見地方の後期古墳は、九州の肥後タイプの横穴式石室が 6 世紀中葉に周布平野のめんぐろ古墳に現われ、その後各地で横穴式石室や横穴墓が点々と築造されるようになる。そして、益田市鶴ノ鼻古墳群、江津市千田古墳群等の古墳群が形成される 6 世紀末～7 世紀初に最盛期をむかえる。<sup>(1)</sup>しかし一方では、益田市小池古墳の土壙や浜田市藏地宅後古墳の箱式石棺のように前代の墓制が引き継ぎ造られており、スムーズに後期古墳文化が浸透していかなかったようである。周布平野では 6 世紀中葉に前記したように肥後タイプの横穴式石室が突如現われるが、その後横穴式石室は造られず、箱式石棺が主流をなし、6 世紀末になって平野の周辺に小規模な横穴式石室が再び造られるようになる。このように後期古墳文化は複雑な様相を呈して各地域に普及していくものと考えられる。

次に石見地方の後期古墳の分布をみてみると静間川、周布川、そして高津川の河口に広がる沖積地周辺や山間部の江川支流域に比較的まとまって横穴式石室や横穴墓が存在している。最盛期における分布状況は、横穴墓が大田市から江川流域の邑智町にかけての地域と西部の益田市に集中的に見られ、横穴式石室は、石見中央部の浜田市、邑智郡、益田市に多く存在し、横穴墓とは分布を異にしており注目される。このように、東部の大田市から邑智町あたりは横穴墓が、浜田市、江津市、金城町、旭町、石見町、瑞穂町といった中央部は横穴式石室が主をなし、西部の益田地方は横穴墓と横穴式石室が混在する地域で石見地方の後期古墳は 3 つの文化圏に分けられる。

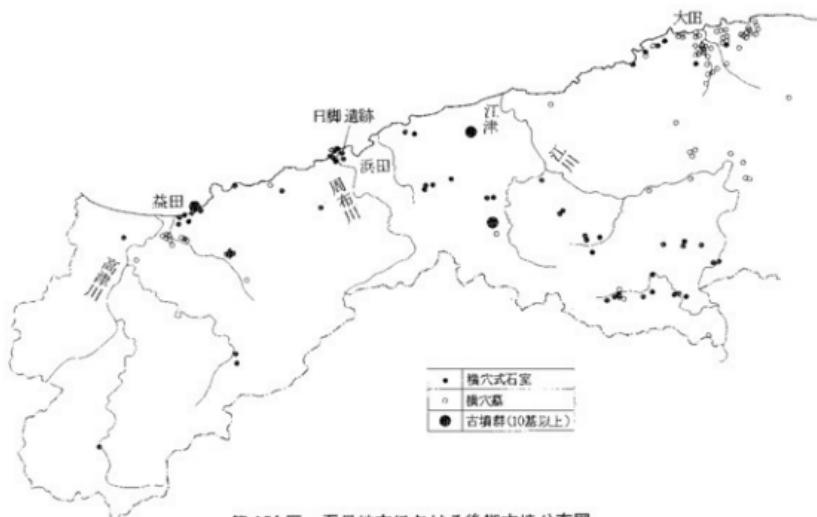
石見中央部の横穴式石室は袖無型で、広島山間部や奥出雲の石室とよく似ているが、平面プランを見てみると、両地方に多い「ハ」字形や奥壁から入口に向かって幅が徐々に狭まるタイプはほとんどなく、「コ」字形タイプ、やや胴張りのあるタイプ、石室入口の幅が奥壁より若干開くタイプの 3 つがある。築造時期は 6 世紀後半～7 世紀初で、石室の構造は側壁の断面が内傾するものから直立するものに変遷していったと考えられる。墳形はほとんどが円墳で、中国地方から兵庫県あた

りに広く分布する列石を伴う方墳（浜田市片山古墳）もある。立地は丘陵斜面に造られているものが多く、江津市千田古墳群や旭町八つ表古墳群のように10基以上からなる古墳群を形成するもの、数基まとまっているもの、単独に築かれているものがある。また、墳丘は石室に比べ小さいが、これは昭和44年に調査された石見町割田古墳<sup>(3)</sup>で地山をかなり深く掘り込んで石室の壁を築造しているため、墳丘の盛土は少量で済むことが確認されている。

西部の益田市に存在する横穴式石室は、石見中央部とは異なり片袖形、両袖形で、益田平野の東側に集中し、横穴墓が密集する南西側地域にはほとんど存在していない。石室の構造は両袖形の崩れたタイプのものや鶴ノ鼻古墳群のように壁の上面と天井石の間に「く」の字形に2枚の石を置いた力石とは違う特殊な構造をもっている石室がある。さらに大田市周辺では数基の横穴式石室が存在するが、石室の構造等詳しいことは分っていない。

横穴墓は、大田市周辺のものが、出雲部との関連が推定される四注式の崩れたタイプであるのに対し、益田平野のものは羨道部の短い丸天井タイプで構造が異なっている。発掘調査を行っている益田市北長堀横穴群では、追葬の際に前葬者の副葬品を玄室入口付近にまとめて整理しており、副葬品は直刀、勾玉、須恵器が一般的で、須恵器の出土量が多いのが特色である。また、石見東部の仁摩町赤崎山横穴群のように、玄門入口の左右と上部に石を積み上げた特殊な構造を持つものも存在する。

このように石見地方における後期古墳は6世紀末～7世紀にかけて最も地方色が強く、3つの文化圏に分れるが、今後はそれぞれの地域で細部にわたる検討が必要である。



第154図 石見地方における後期古墳分布図

## 2) 古墳出土の遺物と築造時期

日脚遺跡で検出した6基の古墳のうち副葬品をもっていたのは1～4号墳・6号墳である。以下副葬品から各古墳の築造時期について述べることにする。

今回の調査で検出した古墳は、いずれも大半が破壊されていたため、出土した遺物が副葬品のすべてとは言えないが、出土遺物をみてみると、各古墳とも須恵器・耳環それに若干の鉄器をもっていることから、これらは日脚古墳群における一般的な副葬品の様相を示しているものと思われる。鉄製品で注目されるのは、2号墳の石室内から出土した二又状鉄器である。これは柄のつく袋部から先端に向かって二又にわかれて外反ぎみに伸びているもので、本来は鋭く尖っていたものと思われ、突き刺して掬いあげるのに便利な道具と推定される。この鉄器は、古墳の被葬者の性格を知るうえに重要な手掛かりを与えるものであるが、他に出土例がなく用途は不明である。耳環は金ないし銀でメッキされたもので、径2.0cm前後の小形のものと径2.5cmあまりの大形のものの二種類がある。また、鉄鐵はいずれも尖根式に属し、4号墳から出土した全長99.5cmの直刀は石見地方では最大級のものである。

須恵器は各古墳から出土しているが、それらのなかで注目されるのは、3号墳から出土したものである。3号墳は他の古墳と比べ保存状態が良く、石室の根石がきれいに残っていた。しかも、追葬時に副葬品を取り出さず、床面に盛土を施して整地していたため、遺物が年代ごとに埋まっており、この地方の須恵器編年を考えるうえに重要な資料となった。(詳細は須恵器編年で述べる。) 3号墳出土の須恵器(IV期・V期・VI期)を基準にして、他の古墳の須恵器をみてみると、いずれもIV期の須恵器を持っていることから、日脚古墳群の築造時期は6世紀末～7世紀初頭ごろと思われる。このように日脚古墳群は、同一時期に築造されているが、1・4号墳は、IV期のみの須恵器しか検出されていないのに対し、2号墳はIV～VI期、6号墳がIV期・VI期の須恵器が出土しており、追葬を行わず一代かぎりの古墳と7世紀後葉～8世紀前葉まで追葬しているものに分けられ、古墳群の性格を知るうえに重要な手掛かりを与えるものとして注目される。

また、5号墳は、墓地により破壊をうけ、遺物が一点も出土しなかったため、築造時期については不明であるが、墳丘上に石材が残っていないことを思えば、5号墳の主体部は横穴式石室でなかったとも考えられ、他の古墳より築造時期が古くなる可能性がある。

## 3) 古墳の構造及び分布状況について

発掘調査で検出された古墳は、いずれも開墾等により墳丘及び石室の大半が破壊されていたので、ここでは2号～4号墳の石室平面プランと6基の古墳の分布状況を中心見ていく。2号墳の石室は奥部から入口に向かって幅が狭くなり、入口付近でわずかに開く平面プランを持つが、2号墳と同じ無袖形の4号墳は、奥部と入口付近の幅がほぼ同じ「コ」の字形を呈している。一方3号墳は側壁が湾曲したいびつな形の玄室を持つ片袖形の石室である。このように、ほぼ同時期に築造されているにもかかわらず3つのタイプの石室構造があり注目される。これらの構造を他の地域に

広げて見てみると、3号墳のような湾曲した片袖形の石室は、益田市薬ノ塚17号墳に、2号墳タイプは益田市泊上古墳にそれぞれ類例があり、当方との関連が考えられるが、4号墳タイプは、石見中央山間部に見られることから、日脚古墳群の横穴式石室は2つの地域に共通する構造を持っていると言えよう。

また、横穴式石室は、全長が3m～4mと比較的小規模なものである。残存していた石材は、いずれも最下部に用いられたもので、幅40cm前後、長さ40cm～100cmあまりの山石である。2号墳は長辺を横に配置していたが、3・4号墳はたて方向に用いていた。奥壁の幅は3～4個の石からなっており、4号墳の玄室内には棺台になると思われる4個の石が存在していた。墳形は馬蹄形の溝が検出された3・4・6号墳が、径8m～10mの円墳と推定されたが、1・2号墳は不明であった。古墳が築かれている立地としては、丘陵斜面(1・2・4号墳)丘陵上(5・6号墳)谷頭(3号墳)に分けられ、1・2号墳が同一丘陵斜面に築かれている外は単独に存在し、各古墳間は40m以上も離れて築造されている。石見地方の小規模な古墳群には密集型(益田市高浜古墳群、仁摩町宝隆寺裏古墳群等)と散在型(瑞穂町長屋原A古墳群等)があり、日脚古墳群のような散在型は石見中央山間部で多く見られる。

このように、日脚古墳群は、石見中央山間部と石見西部の文化圏の接点として位置づけられ、周布地区は、最も古い横穴式石室を持つめんぐろ古墳が築かれる6C中葉までは、古式須恵器を焼いた窯跡が存在するなど、石見地方の中心的な役割を果していたが、6C末になると、2つの文化圏にはされ、急速に力を失っていったことは、石見地方の後期古墳を考える上に重要な手掛りを与えるものとして注目される。

### 3. 日脚1号窯跡及び灰原二次堆積について

1号窯跡は丘陵の西斜面に築かれた全長10.5mあまりの登り窯であるが、I期の古式須恵器を焼いていることから、石見地方の須恵器生産の開始を考える上に重要な手掛りを与える窯跡として注目された。この窯跡は、焚口から4mあまりまでは逆八字形に開き、そこから上方に向かって幅が徐々に狭くなるいわゆる「しゃもじ形」を呈したもので、焚口部から前部にかけては八の字形に開いて灰原に至っている。このような平面プランを持つ窯跡としては、同じ頃の時期と思われる陶邑のTG39-IV号窯、TG43-I号窯があり、古い時期の形態を持っているといえよう。また、床面傾斜も18°あまりと緩く古い要素を持っている。島根県内では、I期の窯跡として安来市門生窯跡、山根窯跡などが以前から知られているが、窯の構造が調査によって明らかにされたのは日脚1号窯が初例であり、その平面形が大阪の陶邑古窯跡群のI期の窯跡と類似していることは興味深い事実である。

1号窯跡は、床面や壁に修復の跡が見られなかったことから操業期間はあまり長くなかったもの

と推定されたが、窯跡内から出土している須恵器は古式の定形化したものと、それがやや退化したものの2つに分けられた。これは、この窯跡が須恵器の形態が変遷する時期に操業していたため、2つのタイプの須恵器が出土したものと考えられる。また、窯跡内から出土した須恵器は大半が、壺甕類の胴部片であったが、その他に蓋坏、高坏、甕、広口壺、短颈壺等の器種があり、壺・甕の胴部片の一部は焼台に使用されていた。

1号窯跡の西側谷部から二次堆積で出土したコンテナ300箱あまりの大量の須恵器は、Ⅰ期・Ⅲ期・Ⅳ期・奈良時代以降の4つの時期に分けられ、Ⅲ期が大半を占め、Ⅳ期はごく少量であった。Ⅰ期・奈良時代以降の須恵器は、同じ谷底の上部あたりで検出された掘立柱建物や、東側斜面に築かれていた1号窯跡に伴うものと考えられるが、日脚遺跡では、Ⅲ期に伴う遺構は検出できなかった。ところが同じ谷底からは、1号窯跡だけでは多すぎる程の大量の窯跡片が見つかっていることや、1600点あまりの埴輪片が出土していることから、この付近に6世紀中葉前後の須恵器・埴輪を焼いた窯跡が存在していたことが分った。これらの須恵器・埴輪は、周布平野西側の丘陵上に存在するめんぐろ古墳出土品ときわめて類似しており、めんぐろの被葬者と破壊された窯跡とは関係があるものと思われ注目される。

石見地方の窯跡を見てみると、石見西部の益田市に、芝、中塚、本片子、柴ヶ迫、杉迫等の古窯跡が集中しており、その他には、浜田市奈古田、国分寺瓦窯跡、旭町大迫、瑞穂町久永古窯跡群(12基あまり)等が知られている。これらの窯跡は6C末~7C初ごろの芝、中塚、杉迫以外すべて奈良時代以降のもので、古墳時代の窯跡は今まで益田市だけでしか見つかっていなかった。ところが今回の日脚遺跡の調査で、5C末~6C初頭ごろに周布平野で当地方ではじめて須恵器の生産が開始され、その後中心が益田市鎌手周辺に移り、奈良時代になると各地で窯が築かれるようになったことが明らかになった。<sup>(4)</sup> 次に、益田市鎌手の芝、中塚窯跡は、昭和32年に早稲田大学によって本片子窯跡は昭和56年に益田市教委によってそれぞれ調査が実施され窯の構造が明らかにされているので、日脚1号窯と比較しながら、石見地方の窯構造の変遷をみてみたい。

6C末ごろの築造と思われる芝窯跡は、全長10.5mあまりの地下式の登り窯で、益田市鎌手大字西平原の丘陵斜面に築かれている。この窯跡は、日脚1号窯跡と比べ、窯体の全長が長いこと、焚口から窯尻までの幅が一定していること、床面の傾斜が21°あまりで日脚より急であることなどの特色を持っている。一方、本片子窯跡は益田市遠田町に所在する須恵器及び瓦兼用の奈良時代の窯で、全長6.3m、幅1.3m~1.8m、床面平均傾度28°を測る。平面形は芝のものに近いが、全長が短かく、小形になっており、床面の傾斜も芝よりやや急になっている。このように現在分っている3つの時期の窯跡から、石見地方における古墳時代から奈良時代にかけての窯跡は、日脚1号窯の徳利型から細長く大型化したものに変わり、そして奈良時代になると小型化していくという変遷がたどられる。

#### 4. 墳輪について

日脚遺跡から出土した埴輪は、C調査区谷部から二次堆積として見つかったもので、1600点あまりの出土量があった。しかしながら、これらのほとんどは小破片であるため、全体器形については明らかではないが、比較的大きな破片からみて、鉢状に上方が開くタイプになるものと思われる。外面の調整は右下りの斜め方向のハケ目が施され、内面は、口縁部近くの上方にハケ目が見られ、指ナデ、指圧痕が残っている。タガは、先端がやや凹む、しっかりした凸帶を持つものと、断面はコの字であるかやや退化したもの2通りに分けられ、後者の肩部は二次調整によって先端が尖っている。また口縁部はやや外反し、先端に凹みを持つ。焼成は軟質が大半を占めるが須恵質のもも含まれる。

日脚遺跡のある周布平野周辺で、埴輪を持つ古墳としては、全長67mの石見地方を代表する周布古墳と肥後タイプの古い横穴式石室を持ち、多量の副葬品が出土しているめんぐろ古墳がある。これらはいずれも断片的な埴輪しか出土していないが、日脚のものと比較してみたい。

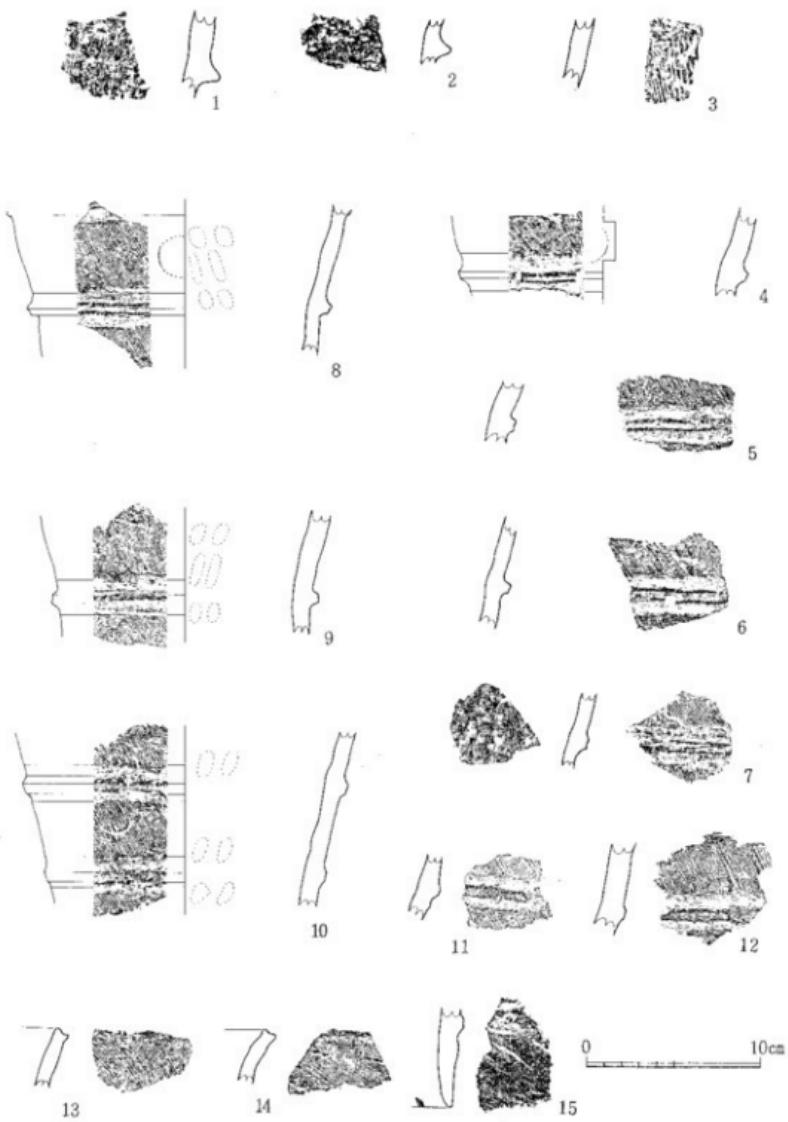
第155図の1~3は周布古墳から出土した埴輪である。タガは日脚のものより凸出度があり、先端が丸く、焼成は軟質で風化がひどい。また、器面調整の外面に荒いハケ目をタテ方向に施し、圓化できなかったが、再調整を行っていない底部片も出土している。4~7はめんぐろ古墳から出土したもので、4~6はタガがしっかりしたタイプ、7はやや退化したものである。4~6は、タガの先端がやや凹む細かな形態、斜方向のハケ目、胎土、焼成等日脚の8、9ときわめて似ており、7も日脚10~12によく似ている。

このように周布地区から出土している埴輪をタガの形態及び調整からみてみると、周布古墳1~3(A類)、日脚8・9・めんぐろ4~5(B類)、日脚10~12・めんぐろ7(C類)の3つに分類できる。

A類の周布古墳の埴輪には底部未調整のものを含んでいるが、このような底部を持つ埴輪は、前期古墳と考えられている大元古墳(益田市)や中期ごろと推定されているスクモ塚(益田市)でみられる事からA類はB・C類より古く位置づけられる。一方、B・C類はめんぐろから肉タイプのものが出土していることから時期的な差はないものと思われる。

B・C類であるめんぐろ古墳出土の埴輪は、形態、調整、胎土、焼成等が日脚遺跡出土のものにきわめてよく似ていることから、日脚の丘陵でめんぐろ古墳の埴輪を焼いていたと思われる。

このことは石見地方における後期古墳文化を解明する上にかかすことのできない重要な事実であると言えよう。



1~3 周布古墳、4~7 めんぐろ古墳、8~15 日脚遺跡

第 155 図 周布地区出土埴輪実測図

## 5. 日脚遺跡における須恵器の編年

昭和34年に発表された「山陰須恵器編年」では、Ⅱ期の標式として浜田市めんぐろ古墳の出土品が取り上げられているが、この中で山本清氏は、石見地方の須恵器は出雲地方のものと比べ形態や手法が異っていることを指摘され、当地方の編年の必要性が言われてきた。しかしながら、その後<sup>(6)</sup>は古式須恵器の資料紹介や益田地方の横穴から出土した須恵器の時期等の研究が発表されているものの、全体的にまとまった編年はなく、ほとんど手がつけられていない状況である。ところが、近年、当地方では発掘調査が増加の一途をたどってきており、須恵器編年は急務となってきた。このような状況の中で、今回の日脚遺跡発掘調査は、古式須恵器を焼いた窯跡をはじめ、奈良時代に統くまでの各時代の須恵器を検出し、当地方の須恵器編年を考える上に貴重な資料がもたらされたので、日脚遺跡を中心に編年を検討してみたい。

日脚遺跡から出土した須恵器をⅡ期のめんぐろ古墳出土のものと比較しながら検討した結果Ⅰ期～Ⅸ期に区分できたので、以下各時期ごとに概要を述べる。

### I 期

1号窯跡の床面及び灰原から検出した須恵器を標式とした。窯跡から出土した蓋環、高環、直口壺、壺甕類等の器種は、古式須恵器の定形化したものと、それがやや退化したものに分けられたのでⅠ期をA・B類に細分した。さらに、C調査区谷部から出土したものの中で1号窯に伴なうと考えられる△類の短頸壺、甕、器台、A・B類の壺、甕類を補足として用いた。1号窯は床面、壁の補修が見られず、操業期間が短かかったと考えられたので、A・B類の時期差はあまりないものと思われる。

### II 期

日脚遺跡では、この時期のものが出土していないので、めんぐろ古墳出土須恵器を標式とした。この古墳から出土した須恵器は、山本編年では一括Ⅱ期として取り扱われているが、追跡の可能性があるので再検討した結果3つの時期（Ⅱ～Ⅲ）に分けられることが判った。その中で蓋環は、身の口唇部に段を持つものを古く位置づけ、古い要素を持つ甕・壺をⅡ期とした。この時期の須恵器は、古式須恵器の特徴を持っているが、蓋環の口径が大きくなるとともに縦の顎部が長頭化するなど器形が大形化し、口縁端部がやや退化する段階のもので、当地方ではこの時期に横穴式石室が出現する。なお、益田市安富遺跡、同松ヶ丘遺跡から出土している小形の蓋環は、日脚1号窯跡B類よりやや後出する要素を持っているので、今後Ⅱ期の中には小形の系統を持つものが並行する可能性がある。

### III 期

C調査区谷部から出土した二次堆積の須恵器は、1号窯や奈良時代以降の掘立柱建物に関係するもの他は、形式がまとまっているので、これをⅢ期の標式とした。また、これらの須恵器は窯壁

片を伴って出土していることから、この時期の窓跡が破壊され二次的に埋められたものと考えられた。この時期は、蓋坏の身の立ち上りに段が消え、高坏は高脚化し、新たな器種として提瓶が出現する段階のものである。Ⅲ期の須恵器を出土している沃田寺山古墳の提瓶とめんぐろ出土の提瓶とは形態がよく似ているので、この時期から周布平野で提瓶が出現するものとし、めんぐろのものを補足として用いた。なお、蓋坏は、蓋部の形態及び身の立ち上りから2つに分けられたが、他の器種は細分できなかった。なお、このⅢ期は、石見地方で後期古墳が各地に普及していく時期にあたり、横穴墓が出現する。

#### IV 期

IV期～VII期までは3号墳から出土した須恵器を中心に区分した。3号墳では追葬時に以前の副葬品を取り出さずに盛土を施して床面を整地していたため、各時代の須恵器が石室内から検出できた。床面は一部搅乱を受けていたが、基本的には形式的に古いものが下層から新しいものが上層からそれぞれ出土した。蓋坏の土器は3つのタイプに分けられ、最も古いものをIV期の基準とした。3号墳と同じ古い蓋坏のみを出土した1号墳の高坏と4号墳の高坏、提瓶、平瓶をIV期として取り扱った。また、提瓶については、沃田寺山から出土している新しいタイプのものを補足として入れ、彫刻類はA調査区から出土したものを用いた。IV期は、古式須恵器の要素が蓋坏の蓋口縁部に一部残るのみで、新たに平瓶が出現し、石見地方で最も後期古墳が数多く築造される時期である。

#### V 期

この時期は古式須恵器の流れをくむ蓋坏が消滅し、新たに小形の蓋付壺が出現する段階のもので、3号墳出土の須恵器を基準とした。蓋は凝宝珠様のつまみが付き、口縁端部に短い反りを持つ。身は、底体部に回転ヘラ削りが施された薄手の造りである。他の器種は不明で、横穴式石室の築造が減退する時期にあたる。

#### VI 期

高台が出現する段階のもので、2号墳が出土したものを入れた。蓋は口縁部に反りを有し、坏はハの字形に開く高台の付くものである。この高台は最も古いと思われる高台と比べ、高さがやや低く、後出的な要素を持っており、2号墳出土のものはVI期の中でも新しい方に位置付けられる。この時期になると古墳はほとんど築造されなくなる。

#### VII 期

蓋の口縁部内側の反りが消え、口縁端部が鳥の口嘴状を呈した形態になるもので、3号墳から出土したものを基準とした。高台の付く大形のものと、高台のない小形のものがある。この時期から肩の張った長頸壺が出現し、古墳の追葬はVII期で終わる。

#### VIII 期

C調査区から出土した須恵器を基準とした。蓋は径の大きな輪状のつまみを持ち、坏はほぼ垂直な高台が外側に付くタイプのもので、他の器種として長頸壺・壺等がある。

## IX 期

Ⅸ期の蓋坏より器形がやや退化した須恵器を入れた。A及びC調査区から出土しており、坏の底部は糸切りである。

以上各時期の概要を述べたが、この編年は日脚遺跡を中心として検討してきたものであり、他の地方から出土している須恵器との比較や各時期の中で器種の不明なものを補なう作業等今後さらに検討が必要と思われる。

- (1) 山本 清「浜田市めんぐろ古墳遺物について」(「島根大学論集-7号」1969)
- (2) 近藤 正「益田・小池古墳群」(「島根県埋蔵文化財調査報告一第V集」1974)
- (3) 吉川 正「割田古墳」(「石見町誌上」1972)
- (4) 大川 清他「島根県益田市西原窯址」(「古代第29・30合併号」1958)
- (5) 謙郎 昭「本片子遺跡・木原古墳」1982
- (6) 山本 清「山陰の須恵器」(「山陰古墳文化の研究」1971)
- (7) 川原和人「石見における占式須恵器」(「松江考古第2集」1978)
- (8) 田中義昭「石西地方における横穴墓の形態と時期」(「山陰文化研究紀要第23号」1983)

第156図 日脚遺跡等出土須恵器時期一覧表

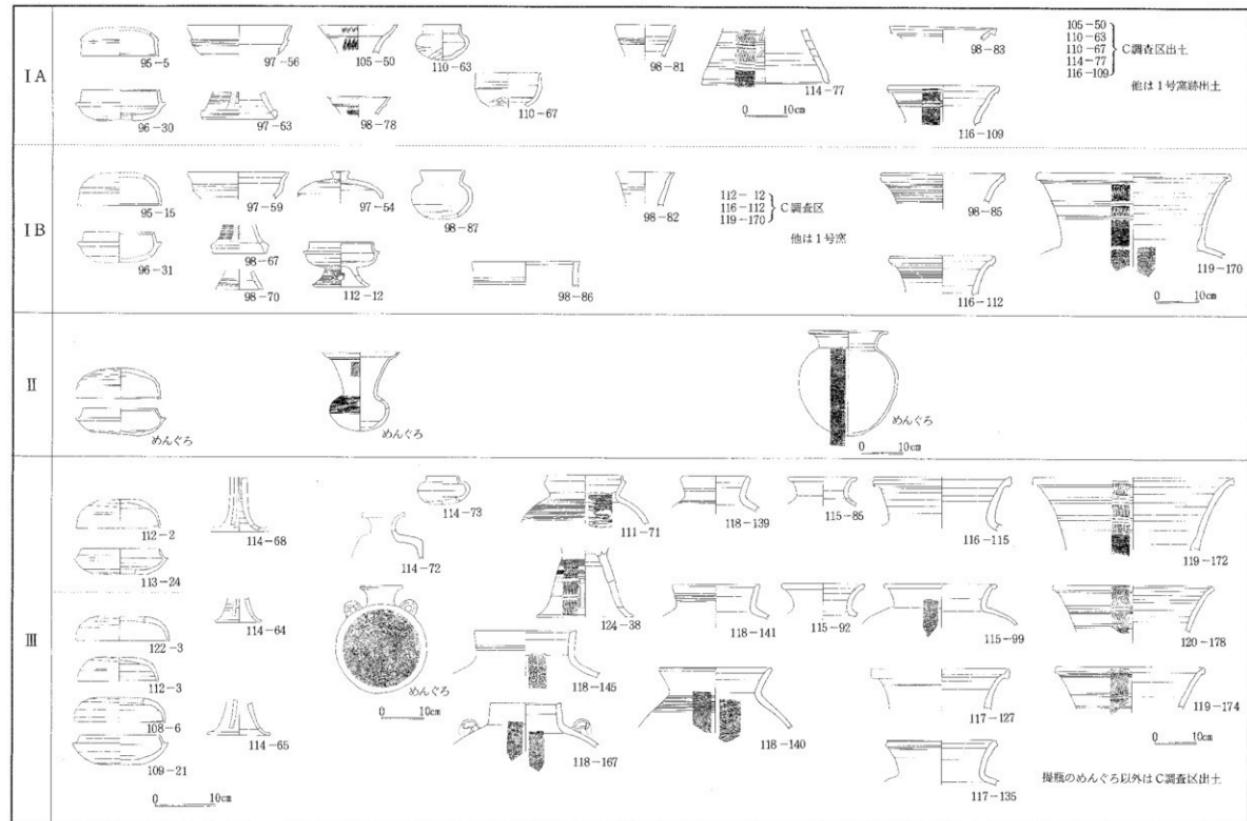
編年	1号窯	めんぐろ	C調査区	沃田寺山	3号墳	1・4号墳	2号墳	6号墳	B調査区	時期
I	↑									5C末 ～6C初
II		↓								6C前
III		↓	↑	↓						6C中～後
IV			↓	↓	↑	↓	↑	↓		6C末 ～7C初
V					↓					7C前
VI							↑			7C後
VII					↑				↑	8C前
VIII			↓						↑	8C後
IX				↓					↓	9C前～中

↑ 編年の基準とした須恵器

↑ 編年に用いた須恵器

↑ 編年に用いていないが  
出土している須恵器

口脚遺跡出土須恵器編年表 I

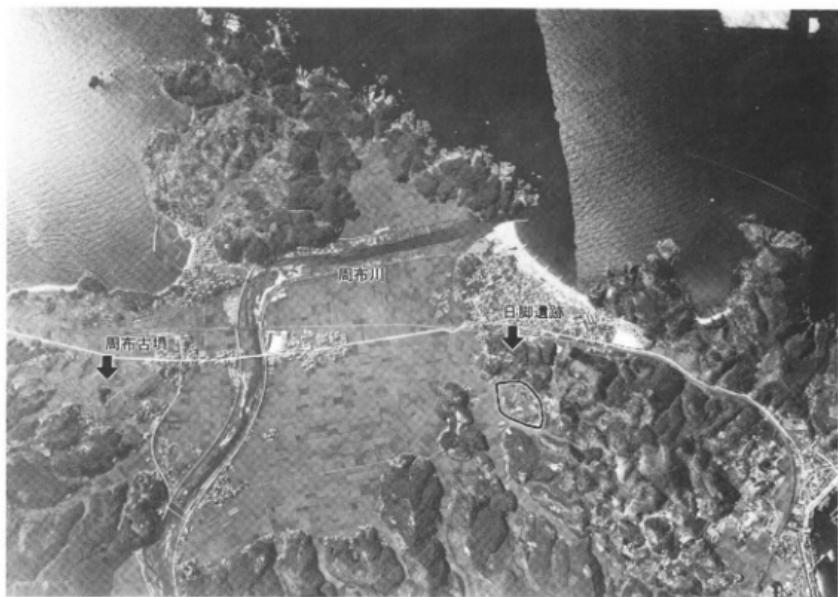


日脚遺跡出土須恵器編年表 II

IV								
	3号埴-3,7	1号埴-37	1号埴-38	1号埴-39	1号埴-35	1号埴-36	1号埴-36	A調査区-4
	4号埴-1,2	1号埴-46	1号埴-45					
	6号埴-7							
V								
VI								
VII								
	3号埴-20, 21	3号埴-22, 23	3号埴-27					
VIII								
	C調査区7層-42,38	C調査区7層-81			C調査区7層-70			
IX								
	B調査区-3	C調査区7層-35					B調査区-15	
								0 10cm

図 版





日脚遺跡周辺の航空写真



大麻山より周布平野を臨む

図版 2



鰐石よりみた日脚遺跡近景



1号墳、2号墳発掘前の状況



1号墳の石室材と掘り方



1号墳下の集石遺構

図版 4



集石造構内遺物出土状況



2号墳、石室掘り方と根石

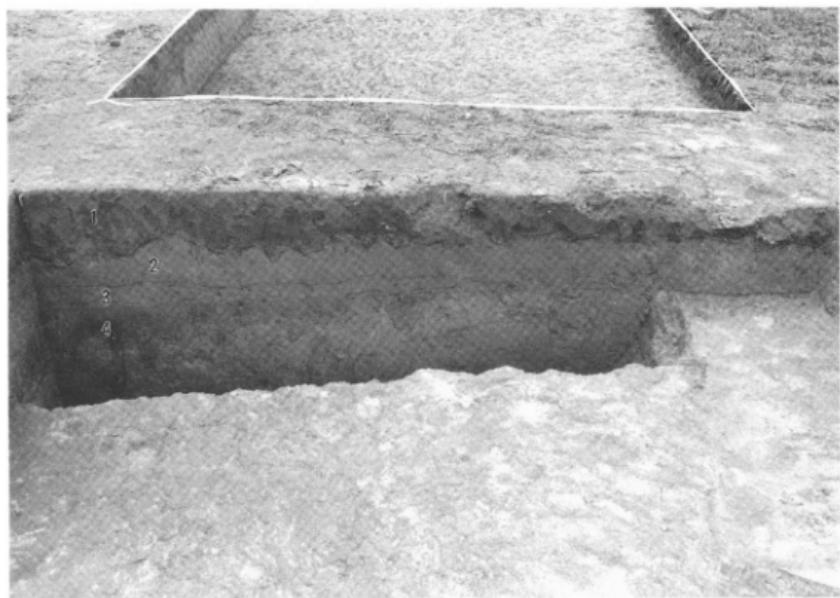


2号墳石室内遺物出土状況



A地区 発掘前の状況

図版 6



A地区 土層堆積状況



A地区 集石炉



A地区 4層内遺物出土状況



A地区 4層内垂飾出土状況

図版 8



A地区 3層下面検出柱穴群



A地区 柱穴内柱痕検出状況



A地区 SK01 土層堆積状況



A地区 SK01 穴掘状況

図版10



3号墳（西上方より）



3号墳（南より）



3号墳遺物出土状況



3号墳玄室内遺物出土状況

図版12



3号墳 羨道内遺物出土状況



3号墳 完掘状況



4号墳、1号窯周辺発掘前の状況（西より）



4号墳（東より）

図版14



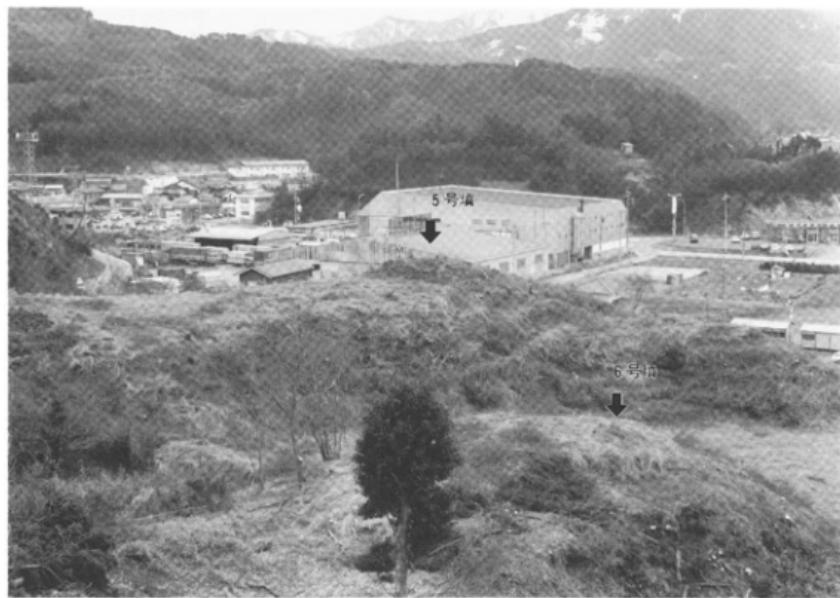
4号墳（西上方より）



4号墳石室内遺物出土状況

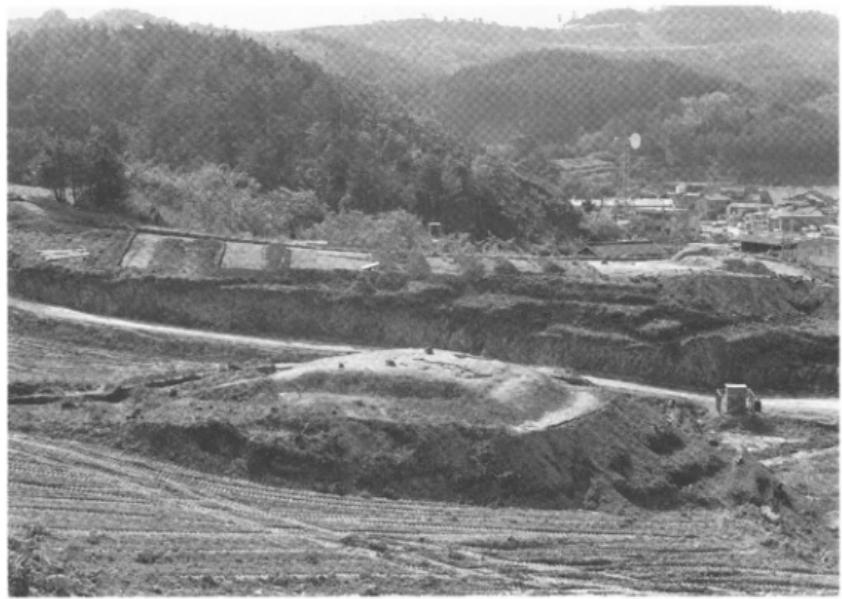


4号墳石室内遺物出土状況



5号墳、6号墳発掘前の状況

図版16



5号墳、6号墳発掘後の状況



5号墳全景（北より）



5号填盛土状况



5号填盛土状况

図版18



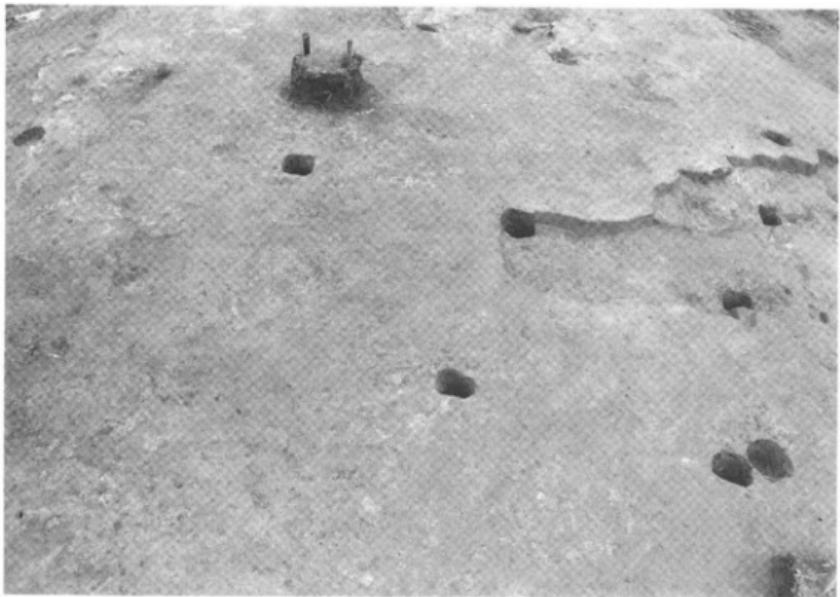
5号墳付近 宝篋印塔



6号墳（南より）



6号墳石室掘り方内遺物出土状況



6号墳周辺 柱穴群（北より）

図版20



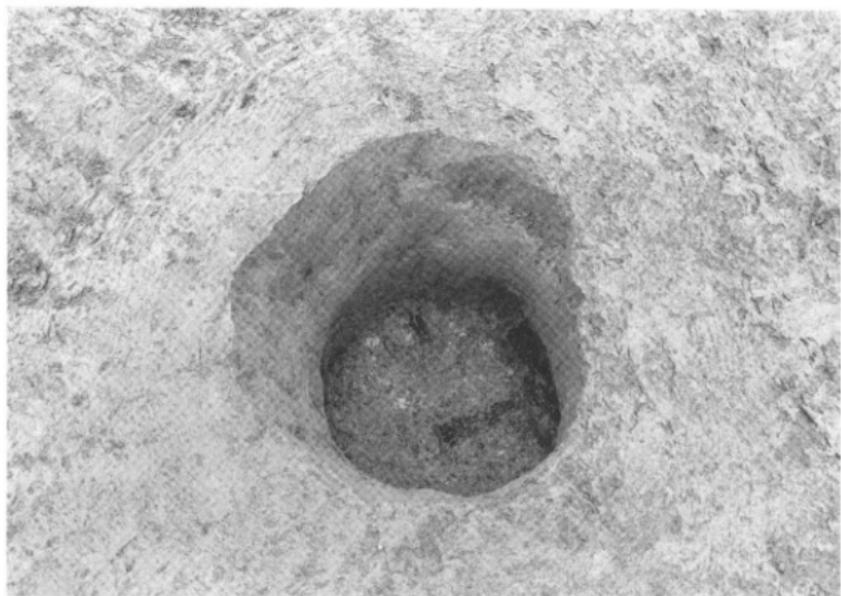
B地区 土層堆積状況



B地区 土層堆積状況



B地区 SK02・03



B地区 SK02

図版22



B地区 SK04



B地区 SK04 内堆積状況

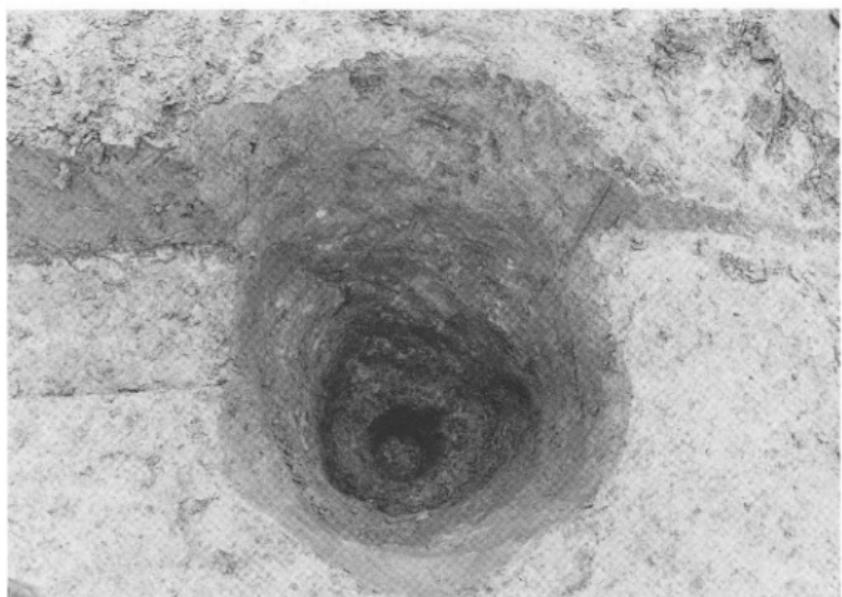


B地区 SK05



B地区 SK05内堆積状況

図版24



B地区 SK06



B地区 SK07



B地区 9層下面 SD04柱穴群



B地区 9層下面 SD05土層堆積状況



C地区 1号窯跡（南より）



1号窯跡検出状況



1号窯跡窯体内遺物出土状況



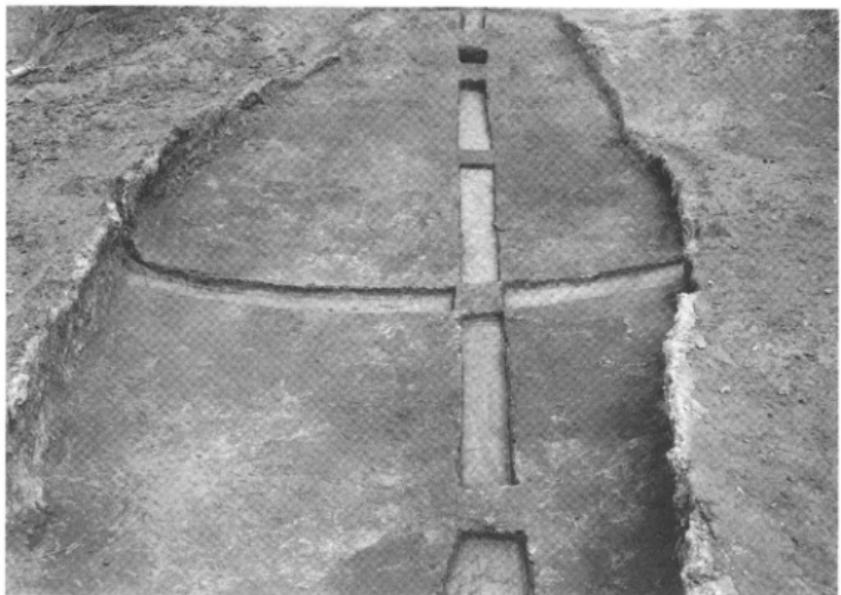
1号窑跡窑体縦断土層



1号窑跡窑体横断土層



1号窯跡窯体完掘状況



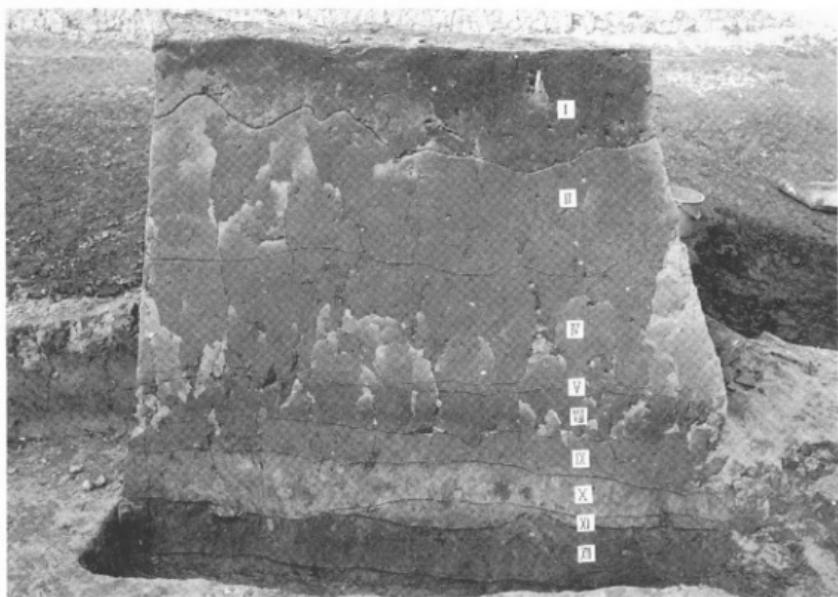
1号窯体断ち割り状況



1号窯跡熱残留地磁気測定風景



1号窯跡埋め戻し状況

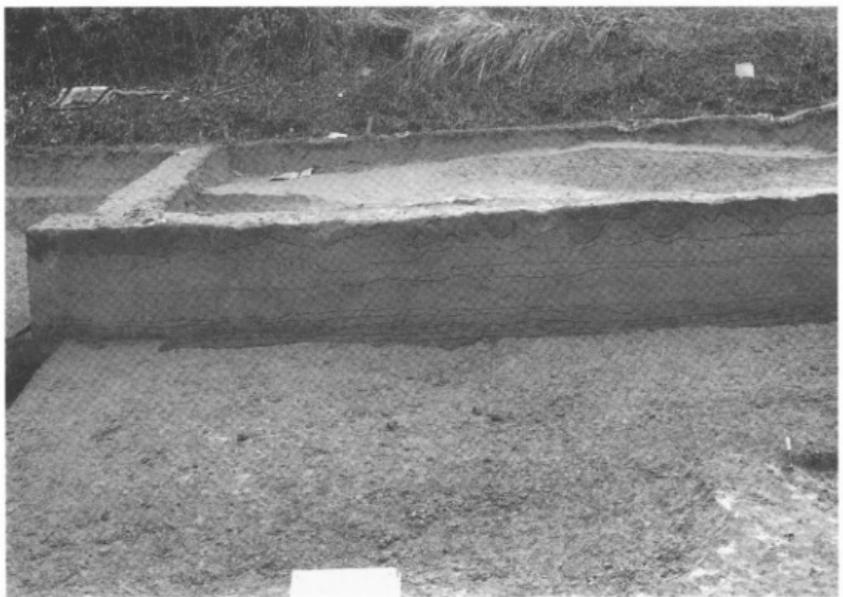


C地区 谷底部土層堆積状況



C地区 谷底部横断土層

図版32



C地区 谷底部縦断土層



C地区 谷底部完掘状況